

やっとわかったぞ！

修学旅行最終日、23R に同行し「和菓子作り体験」をした。師匠の説明に従いキットをのばしたり丸めたりしていたが、どうもうまいかない。だんだん私は落ちこぼれていった。周りの子たちは上手に作っている。なんで私だけできないんだ、と情けなくなった。元々器用な方ではないからしょうがないか、とその時は思っていた。しかし和菓子作りの時、私の目の前に座ってた小林先生から、ついこの前「高橋先生があんなに人の話を聞いてないとは思いませんでした」と言われてからやっとわかったことがある。私は視力が左右0.1だ。しかも矯正していない。体験の時、一番後ろの席だったので、師匠の手にあるキットや説明の図を必死に凝視していた。それでも見えない。この時の私は視覚をフルに使うことに懸命になるあまり、聴覚がお留守になっていた。すると師匠の言葉は全て単なる BGM と化した。そういうわけで、師匠の話を全く聞けてない状況に陥ったというわけさ。(小林先生、すごいことに気づかせてくださり、感謝しております！)

ここで学んだ教訓…視力は矯正しないと学業その他に支障がでます！(イマサラですけど…)

当たり前のことだけど、人間の感覚の不思議さを実感したねえ～。自分が必要としているもの以外はシャットアウトする機能が備わってるんだよね。つまり選択的に物事を見聞きしているということ。何かに集中していれば、騒音だって気にならない。こういう機能が備わってなければ、五感をフル稼働してしまい情報の渦に巻き込まれ、処理のキャパを軽く超えてしまうだろう。

ユーミンの曲作りの秘訣

「星の王子さまと私」の映画化に伴い、松任谷由実(ユーミン)が主題歌を担当したことで、最近メディアに登場する機会が多くなった。ある番組での彼女のお話を聞いてすごく納得したことがある。

「私の詞には、感情や具体的な物を表す言葉は書かない。情景を書くことで、聞く側が自由にその場面を想像できる。それをどのように感じるかは、鑑賞者に委ねている。」

これは「ルージュの伝言」(「魔女の宅急便」の主題歌としても有名)でも同様。こうした効果を意図して楽曲を作っていたなんて、彼女はやっぱりすごいと改めて思った。「口紅」や「鏡」という歌詞は出てこないけど、曲を聞いた人はバスルームの鏡に口紅でメッセージが書いてある情景を想像してしまうだろう。

「悲しい」とかの感情表現を使うと、それは曲の中の登場人物の感情であり、鑑賞者は第三者的な目で曲を聞く。しかし情景だけだと感情は聞く側のものとなり、自分の思い出と交錯させて実体験に近い感覚を想起させるから、つい曲に引き込まれてしまうんだね。

やられたよ…。

言葉があることでのデメリット

人は言語を使えることで様々なメリットを得ているよね。ただ言葉があることで、かえってめんどういことになってるって考え方もあるのではないかい？

動物は言葉が使えないから、もし自分のペットがいつもと違うなと感じたら、その子の行動とか手がかりになるものを必死に見つけようと観察し、今どういう状況にあるのかをつきとめようとするよね。でも人は「大丈夫」と言ったり、取返して明るく振舞ったりして「大丈夫でない」状況を見せないようにしたりもする。

目の前の言動はその人の真実ではないかもしれない。「大丈夫」ではなく、本当は「助けて」なのかも。その人の話をしっかりと聴いた上で、今度は少しフォーカスを引き気味に見てみると、本当に訴えたいことは何かを少し冷静に考えてみられることもある。表面的な言動に右往左往されずに、そこから発するメッセージを自分の心で咀嚼し、感じ取るトレーニングは何か役に立つかもしれない。

闘病が辛くて「死にたい」という患者さんが、果たして本当に安楽死を望んでいるのか…。家族や親身になって治療にあたっている主治医などは、患者さんの苦痛を目の前にして「死なせてくれ」の言葉にもすごく悩むと思う。みんなはどう考える？ 参考文献:「神の手」(久坂部羊)